

相続争いの

Measures of the dispute over succession

兄、姉、そして次男の私で、配偶者1人と子供3人でした。初七日が終わり、父の車庫の奥にある金庫室に入り、金庫を全員で開けてみると、なんと、現金が2億6千万円ありました! それも聖徳太子などの旧紙幣も混ざっているではありませんか。メインバンクの北海道拓殖銀行がつぶれた時に下したお金を金庫に入れていたようです。父の遺した財産をどうすればいいのか、私たちにはわかりませんでした。そこで、父の工務店の顧問税理士に相続関係を依頼することにしました。相続税を支払ったあとも、お金を取り巻く様々な問題が起きました。新聞や雑誌で相続争いのことは目にしたことはいくつもありますが、まさか自分にも起こるとは全く考えていませんでした。父親が生きているうちに、相続の問題について話し合っておけば、トラブルは防げたのかもしれない。しかし、日本人の感性ではなかなか、それも難しいのが現実です。私もそうでした。父にお金のことを話せば、「俺の金をあてにしているのか」と言われるのが関の山です。父には現金以外に、土地やアパートなどの資産がありました。その分割協議については、

4月1日より施行される予定であった相続税の増税は、未だ行われておりません。国会にて法案が通っていないためです。基本的な増税路線は変わりませんので、もし6月に法案が通れば、7月から施行になります。これが9月になるかもしれませんし、来年になってしまうかもしれないというのが現状です。当初は、相続税が増える代わりに、法人税を減税させるというようなセットの話が出ていました。しかし、現在は東日本大震災の影響で、いろいろな状況が変わっています。どのような落としどころとなるのかは、未だ不透明な状況です。

相続税の税制改正はいつ?

母、長男、姉、私で話し合い、長男が書類を作成することになりました。ところが、一夜明けるとその協議案がひっくりかえります。まとめるのに数日かけた分割協議の内容を書類にすると、翌朝に長男に反故にされその繰り返しでした。A案、B案、C案、D案、E案、F案までいきました。もう笑うしかないという状況でした。

父の残した財産が一家を地獄に陥れた

分割協議書にサインをした夜のことで。無事に全員がサインし、納税もしました。そのとき、長男は満面の笑みを浮かべてシャンパンまで持ち出したのです。今思えばこれが、ドロドロの相続争いのスタートの号砲でした。協議書にサインした翌月の月末のことです。父の工務店では月末が勘定日で、その日に下請けさんたちは事務所にお金を取りにくるのが恒例でした。午前中に下請けさんが来て、小切手や現金で母が支払いました。そして、母が昼食を食べて事務所に戻ってみると、驚くべきことが起きました。母の机の中にあるベッキ、小切手帳や現金、会社の実印などがすべて消えていたのです。たった1時間の昼食の間です。その場に居た母と姉は絶句したそうです。長男の嫁がすべてを持っていった。母が創業者から、ただの事務員になった瞬間でした。数日後、念のために母親名義のアパートの契約を調べてみると、既に数件の契約書の名義が長男名義に代わっていて、家賃の振込み先も長男の口座に変更されていた。さらに、母の個人の実印と印鑑カードまで持ち去られているのには本当に驚きました。

事例と対策!



木元 勇
Isamu Kimoto



浅野和治
Kazuharu Asano



白岩 貢
Mitugu Shiraiwa

仲の良かった家族が、相続争いで赤の他人のようになってしまう・・・これは決して他人事ではありません。今回登場された白岩オーナーは、泥沼の相続争いを経て、現在も兄弟とは音信不通です。その白岩オーナーを支えた相続専門の税理士と相続コーディネーターにお越し頂き、事例と対策について聞いた

父親が他界後、金庫の中に2億6000万が

白岩 私の父は静岡から戦後間もなく東京に出てきて、大工をしていましたが、後に独立し、世田谷で工務店を開業しました。父は借金がとても嫌いだっただけで、工務店としては珍しくすべて自己資金で経営し、工場や倉庫、自宅まで無担保・無借金で経営していました。ところが、その父が2002年に突然心不全で亡くなり(享年76歳)、事態は急変してしまいました。父親が死後の準備を何もしていなかったため、親族との相続争いや国税の3ヵ月に渡る調査を経験することになったのです。父の死後、相続が発生したのは母、



白岩貢氏、浅野税理士、木元物納コーディネーターが監修をした最新刊がこちら。座談会の続きを読みみたい方は是非ご購入下さい。ごま書房新社より1500円で好評発売中です。